別紙様式

令和４年３月 10 日

教育長　様

校番　９　　尾道東　高等学校長
（　全日制　課程）

「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校
令和３年度　実施報告書

１　学校の教育目標等

(1) 教育目標

≪令和３年度教育目標≫

校訓「自主・自立」のもと，国際教養コースを有する普通科高校として言語活動を推進し，地域や国際社会に貢献しながら活躍できる人材を育成します。

(2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

≪育てたい生徒像≫

① 自ら能動的に学び，知識を活用して課題に挑戦していく生徒
② 困難に直面しても柔軟な態度で課題に向き合える生徒
③ 多様な人と協働して新しい価値を生み出せる生徒

≪本校で育成を目指す資質・能力≫

① 探究を深める力（知識・技能）
② 仮説を立てる力（思考力・判断力・表現力等）
③ 理由づける力（思考力・判断力・表現力等）
④⑤ 聞く力，話す力（思考力・判断力・表現力等）
⑥ 主体的に粘り強く学習に取り組む態度（学びに向かう力・人間性）

(3) 学科等の特色

普通科「国際教養コース」があるという強みを生かし，言語活動の充実や国際理解を深める取組の推進を学校全体で取り組んでいる。これらの取組が「国際教養コース」のみならず，学校全体のものとなるよう「尾道東高等学校　グローバル人材育成計画」を策定し，取組を進めている。具体的には，「外国語コミュニケーション能力の育成」を目指した授業でのディベート活動等に加え，姉妹校などとの短期・長期留学生の積極的な受け入れや派遣を行いながら「多様な価値観と出会う経験の充実」，そのような活動で身に付けた力を発揮しながら「他者と協働して学び，課題発見・課題解決していく力の育成」等の目標を設定し，本校を卒業し，国際社会で大きく活躍できる人材の育成に力を入れている。

また，平成 30 年度から「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る研究開発校として，本校で付けたい資質・能力を整理し，それを育成するための「総合的な探究の時間」の全体計画等の抜本的な改革を行っている。これにより，３年間を通じて課題発見・解決学習に必要な資質・能力を総合的に育成するための土台を完成させることができた。それに伴い，「総合的な探究の時間」の取組内容や研究の質が以前よりも向上しており，生徒も自らが設定した課題の解決に向け，積極的に取り組むようになってきている。

そして，本校においては，課題発見・解決学習に必要な資質・能力を「総合的な探究の時間」で発揮するために，各教科・科目等での学びの機会を通して，資質・能力の育成を行っている。そのため，各教科の学びのつながりを重視したいという思いから，本校独自のカリキュラム・マップを作成した。各教科・科目間での内容的な教科横断を今年度から実施する予定である。

これらの活動を通して，数値化できる学力のみならず，これからの社会で中心となり，様々な課題に直面しても解決に向けた手立てを考え，解決に導くことができる力を持った人材の育成に取り組んでいる。

２　研究の概要

(1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標

他校と比べた際の本校の一番の特色は，普通科「国際教養コース」があるという点である。「国際教養コース」は，平成14年度から文部科学省より「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール」研究指定校を受け，英語の４技能をバランスよく育成するために英語ディベートの取組を継続的に行ってきた。ディベート活動は，単に「外国語コミュニケーション能力」を高めることに繋がるだけでなく，「本校で育成を目指す資質・能力」を無理なく楽しみながら育てていくのに有効な手段となっている。また，国際教養コースの生徒の取組を中心として，グローバルな社会を実感する場面が充実しており，他校に比べ国際社会とかかわり意見交流をする機会が多い点が本校の強みである。

本校がこれまで取り組んできた「課題研究」においては，問いの掘り下げが弱いまま研究を進めてしまう生徒がいることが本校の課題である。自分とは異なる多様な意見に耳を傾け，それを考慮しながら振り返り，自分の主張を組み立て直すという過程を踏むことで，問いを深く捉え，研究を進めていくことが可能になると考える。そのように対話的に思考を深めていくために，ディベート，特に即興型のディベートを取り入れた取組を実践していきたい。

そのためにも，各教科・科目の授業を通して「本校で育成を目指す資質・能力」を育成するとともに，ディベートの実践に必要なスキルを身に付け，それらを「総合的な探究の時間」で発揮するようなカリキュラムの開発を行っていきたい。

(2) ３年後の目指す学校の姿

社会の変化に受け身で対処するのではなく，主体的に向き合って関わり合い，自ら課題を設定し，他者と協働して解決策を探究し，提案することができる「資質・能力」を身に付けた生徒を育成するという視点に立ち，「総合的な探究の時間」で行う「課題研究」において，各教科・科目で身に付けた資質・能力が関連付けられ，統合された形で発揮されるよう教育活動を行っていく。

具体的には，過去３年間の「課題発見・解決学習推進プロジェクト」の取組で確立してきた指導方法・評価方法を今後３年間で各教科・科目，さらに教科横断的な学習において実践し，より効果的な形で資質・能力を育成するために，学校全体のカリキュラム・マップやシラバスを整備すること，また，評価についても，各教科及び教科横断的な学習についての具体的な評価ルーブリックの完成を目指す。

(3) 令和３年度の目標

ア　アウトプット（活動指標）

①　「総合的な探究の時間」を中心として，学校として育成を目指す資質・能力についてのルーブリックを活用し，教員による評価及び生徒自身による自己評価を用いて，生徒の学習状況を適切に評価することができている。

②　「総合的な探究の時間」において年間計画に基づき評価を実施する中で，より適切な評価物や評価時期を検討することができている。

③　年度当初に設定したシラバスに基づき，各教科において，年に１回は教科横断学習を行うことができている。

イ　アウトカム（成果目標）

①　第１学年の「総合的な探究の時間」において，「探究を深める力」「仮説を立てる力」「理由づける力」「聞く力・話す力」「主体的に粘り強く学習に取り組む態度（学習調整力）」について，レベルＢ（４段階の下から２つ目）以上の力を持つ生徒の割合が90％以上になっている。

②　第２学年の「総合的な探究の時間」において，「探究を深める力」「仮説を立てる力」「理由づける力」「聞く力・話す力」「主体的に粘り強く学習に取り組む態度（学習調整力）」について，レベルＡ（４段階の下から３つ目）以上の力を持つ生徒の割合が60％以上になっている。

③　第３学年の「総合的な探究の時間」において，「探究を深める力」「仮説を立てる力」「理由づける力」「聞く力・話す力」「主体的に粘り強く学習に取り組む態度（学習調整力）」について，レベルＡ（４段階の下から３つ目）以上の力を持つ生徒の割合が90％以上になっている。

(4) 令和３年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア　カリキュラムの核とする教科・科目等名

第１学年～第３学年の「総合的な探究の時間」

イ　カリキュラム開発の概要

まず，本校におけるカリキュラム開発を進める上で，「本校で育成を目指す資質・能力」の整理と共有を行った。昨年度まで設定していた「本校で育成を目指す資質・能力」は，「資質・能力の項目が多すぎること」「新学習指導要領で示される資質・能力の３つの柱のうち，「思考力・判断力・表現力等」に係る項目しかなかったこと」が課題に挙がり，令和２年度の取組の中で，資質・能力の精選と再設定を行った。今年度は新たに設定をした「本校で育成を目指す資質・能力」の，校内での普及と教職員の理解を深めることを目指す取組を進めた。

具体的には，教育研究部を中心に作成した令和３年度版マスタールーブリックの内容について，校内研修の場面を複数回設定し，取組の周知を行った。４月と５月にはマスタールーブリックを提示し，本校でのこれまでの取組と今年度の取組について研修を行った。また，「本校で育成を目指す資質・能力」の一つである「理由づける力」についての研修や，各教科・科目の「本質的な問い」についての研修を行った。

加えて，学校の教育目標や「本校で育成を目指す資質・能力」の育成に向けて，「総合的な探究の時間」のカリキュラム開発に取り組んだ。具体的には，「①３年間で行う探究活動の整理と実践」「②探究活動のサイクルの整理」「③ディベート活動の導入」の３つについて取組を進めた。

まず，「①３年間で行う探究活動の整理と実践」についてである。昨年度まで，「総合的な探究の時間」では，各学年で一つの単元を作成し「尾道探究」「社会探究」「個人探究」と，取組の内容の高度化を図ってきた。しかしながら，時間的な制約が大きく探究活動ではなく単なる調べ活動に終わってしまう生徒が多くみられた。そこで，今年度からは３年間で「尾道探究」「課題探究」という二つの単元に絞って探究活動を行うことで，それぞれの活動に時間をかけて取り組むことができるような調整を行った。これにより時間的な余裕が生まれたこともあり，今年度の第１学年は，単に調査・実験を進めるだけでなく，尾道市議会など地域の組織との連携が進むなど，例年にない取組を進めることができている。

次に，「②探究活動のサイクルの整理」についてである。昨年度までの成果物として，本校では「探究活動のサイクルＭＡＰ」を作成し，探究活動をスモールステップで段階的に行っていくことを図式化した資料を作成している。今年度は，探究活動の小項目ごとの到達目標を示した，「課題研究の段階別評価ルーブリック」を作成した。これにより，抽象的であった探究活動の小項目を具体的に，どのような資質・能力を育成するために行うものかを整理することができ，生徒がゴールイメージを持って各活動に取り組むとともに，教員が行う評価を探究活動の小項目ごとに段階的に行うことが可能となった。

最後は，「③ディベート活動の導入」である。「(1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標」でも述べたように，本校の特色である，「国際教養コース」で行ってきたディベート活動を「総合的な探究の時間」に組み込み実践を行った。これまでの本校の取組の中で課題となっていた一つに，社会の諸課題についての解決策等が客観的データに基づかない，主観的な意見になってしまうことが挙げられていた。ディベート活動を行うことにより，客観的なデータに基づく論理的な思考や，それらの情報の収集力，相手に分かりやすく的確に発信する力などの育成を図ることができるのではないかとの思いからディベート活動を取り入れ実践をした。第２学年は９月に，第１学年は11 月にディベート活動を取り入れ実践を行った。

ウ　校内体制

カリキュラム開発等を全教員が参画して行うために行った工夫は以下の通りである。

①　全体研修の場面の設定

前述の通り，本校では昨年度までの取組の中で，マスタールーブリックの作成やカリキュラム開発はある程度の水準まで達していた。そこで，各種研修会を開く中で，本校の取組の共有を図ることを重視した。また，11 月に行った公開研究授業では第１学年のディベート活動について全教員で授業参観を行い，その取組の様子を共有した。

②　「本校で育成を目指す資質・能力」に係る活用問題の作成

本校では「本校で育成を目指す資質・能力」は「総合的な探究の時間」のみで育成・発揮されるものではなく，各教科・科目の学習活動においても育まれるものであると整理している。そのため，本校では定期考査においてそれらの資質・能力を用いる活用問題の作成を行っている。学期に１回は活用問題を作成することで，「本校で育成を目指す資質・能力」と各教科学習について関係性を考える機会を設け，全ての教育活動で資質・能力の育成を図ることを目指した。

(5) 学習評価

今年度は，各単元において，生徒の資質・能力を随時評価し，その結果を生徒に還元する取組を行うことができなかった。その要因として，事前に評価基準等の整理を十分に行うことができなかったことが挙げられる。この反省も踏まえ「課題研究の段階別評価ルーブリック」を作成した。今後は，「課題研究の段階別評価ルーブリック」の記述の検討を行い，来年度は段階ごとに自己評価と教員評価を行い，その後の活動に活かしていきたい。

また，本校は民間テストを活用した評価方法の研究対象校であり，第１学年を対象に 12 月に受検した。ＧＰＳ-Academic で測定する３つの思考力は「本校で育成を目指す資質・能力」との一定程度の関連性がみられるものと考えられる（批判的思考力：「理由づける力」，協働的思考力：「聞く力・話す力」，創造的思考力：「仮説を立てる力」）。今年度の「本校で育成を目指す資質・能力」の評価結果は，３月の研究発表会において見取る予定であるため，現段階でその相関関係は見とれていないが，今後，それぞれの評価結果の比較を行い，「本校で育成を目指す資質・能力」との関係性を整理し，その活用方法について検証を進めたい。

(6) カリキュラム評価

今年度の「本校で育成を目指す資質・能力」の評価結果は，３月の研究発表会において見取る予定であるため，学校全体のカリキュラムを評価することができていない。来年度の９月以降には，このカリキュラムを行った第３学年の生徒の成果物や蓄積した評価データが集計できるため，そのデータをもとに改善を行っていきたい。

３　令和３年度の成果及び課題

(1) 成果

令和３年度の主な成果は以下の２点である。

①　「課題研究の段階別評価ルーブリック」を作成できたこと

２(5)でも述べた通り，今年度は，各単元において，生徒の資質・能力を随時評価し，その結果を生徒に還元する取組を行うことができなかった。「課題研究の段階別評価ルーブリック」が完成したことによって，成果物だけに頼らず，探究活動の活動ごとに評価を実践することが可能となった。

②　ディベート活動を実践でできたこと

第１学年・第２学年ともに，ディベート活動を実践することができた。第２学年で実践したディベート活動を終えての生徒の振り返りの記述を見ると，「本校で育成を目指す資質・能力」のうち，「仮説を立てる力」「理由づける力」「聞く力・話す力」に係る記述が多く見られた。育成すべき資質・能力の三つの柱のうちの「思考力・判断力・表現力等」に関係する力を必要とする取組であることが分かったため，取組で出てきた生徒の気付きを，課題探究にも活用できるよう工夫していきたい。

(2) 課題

令和３年度の主な課題は以下の２点である。

①　最後の成果物による評価となっており，プロセスの評価を実践できていないこと。

生徒の成果物のみの評価になってしまうと，取組ごとでの資質・能力の見取りができないことに加え，評価者の負担も一定の時期に集中してしまうため，評価のための評価となってしまう。一方で，プロセスの評価を実践することで，生徒自身が自らの状況を客観的に把握することができ，評価のフィードバックを踏まえた取組を行うことが可能となる。評価結果を十分に活用できるようなシステムづくりが必要である。

②　自己評価のデータの蓄積がないため，生徒の変容等を見取るデータが少ないこと

これまでの取組では，教員の評価が中心となっていたため，生徒自身の意識の変化等を見取るデータを収集できていなかった。今後は探究活動のプロセスごとに生徒自身の自己評価を行い，その変容についても見取っていきたい。また。「本校で育成を目指す資質・能力」について，生徒にアンケートを取り，それぞれの資質・能力に対する生徒自身の自己評価の数値も検証し，来年度，どの資質・能力の育成に向けた取組が必要かを整理していきたい。

４　令和４年度の目標及び取組内容

(1) 令和４年度の目標

ア　アウトプット（活動指標）

①　「総合的な探究の時間」を核として，マスタールーブリックを活用し，教員による評価及び生徒自身による自己評価を行い，生徒の学習状況を適切に評価することができている。

②　前年度に検討した「総合的な探究の時間」における評価に基づいて，評価実践を改善することができている。

③　「本校で育成を目指す資質・能力」に係る活用問題やパフォーマンス課題の作成とその分析を通して，学校教育全体で資質・能力を育成することができている。

イ　アウトカム（成果目標）

①　第１学年の「総合的な探究の時間」において，「探究を深める力」「仮説を立てる力」「理由づける力」「聞く力・話す力」「主体的に粘り強く学習に取り組む態度（学習調整力）」について，レベルＢ（４段階の下から２つ目）以上の力を持つ生徒の割合が100%になっている。

②　第２学年の「総合的な探究の時間」において，「探究を深める力「仮説を立てる力」「理由づける力」「聞く力・話す力」「主体的に粘り強く学習に取り組む態度（学習調整力）」について，レベルＡ（４段階の下から３つ目）以上の力を持つ生徒の割合が70%以上になっている。

③　第３学年の「総合的な探究の時間」において，「探究を深める力」「仮説を立てる力」「理由づける力」「聞く力・話す力」「主体的に粘り強く学習に取り組む態度（学習調整力）」について，レベルＡ（４段階の下から３つ目）以上の力を持つ生徒の割合が100%になっている。

⑵ 令和４年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア　カリキュラム開発の概要

令和４年度に行う主な取組は以下の２点である。

①　実現可能で実用的な評価基準，評価計画の作成

評価を行い，フィードバックを行うことで，生徒の活動を改善することも重要であるが，教員が評価に追われ，負担感が増えるようでは継続して探究活動を行えなくなってしまう。探究活動のサイクルMAPに基づく「課題研究の段階別評価ルーブリック」を活用することで，それぞれの段階ごとに特に身に付けたい力を整理し，生徒と教員がそれらの資質・能力を意識し，取組後にはそれらを評価できる体制づくりを行う。そのためにも，「課題研究の段階別評価ルーブリック」の記述とマスタールーブリックの関連性を再整理し，実用的な評価ルーブリックづくりを行っていく。また，評価結果のデータを蓄積することによって「総合的な探究の時間」の取組の改善等につなげていきたい。

②　各教科・科目での資質・能力に向けた取組の実践

現在，定期考査等において「本校で育成を目指す資質・能力」を用いる活用問題の作成を行っているが，それらの検証などはできていない。各教科・科目が持つ教科の特性によって，育成しやすい資質・能力があると考えられるため，活用問題の共有・分析等を通し，「本校で育成を目指す資質・能力」の育成につなげていきたい。また，活用問題だけでなく各単元でのパフォーマンス課題の検討や共有を通して学校教育全体で資質・能力の育成をしていきたい。

イ　校内体制

カリキュラム開発実行委員会を中心に，「総合的な探究の時間」を軸として，全ての教育活動で資質・能力の育成ができるよう，全教職員を巻き込んだ取組を目指す。

少なくとも年３回の教育研究部主催の研修会を通して，各学年の取組内容や現状の共有を行うとともに，活動の様子や成果物を評価し，その評価結果についても共有することで，すべての教員が参画する場面を作っていきたい。また，「総合的な探究の時間」だけでなく，本校で育成したい資質・能力の検討やそれらを育成するための授業づくりを検証する機会を設けていく。

各教科においては，教科主任会議や校務運営会議で協議した内容を，教科会等を通じて全教員に情報を行き渡らせる。各教科が必要に応じて実践報告を行い，全教員が研究に参画できるような体制を作っていきたい。